

# 平生鈆三郎の各財閥論

三 島 康 雄

## 1. は じ め に

平生鈆三郎は慶応2年(1866)5月に美濃国加納で生まれ、明治23年(1890)7月に東京高等商業学校を卒業し、明治27年7月に東京海上保険株式会社に入社し、大正6年(1917)4月に同社専務に就任して、同14年4月まで在任したが、そのほかに大正海上火災保険(三井系)、扶桑海上火災保険(住友系)、大福海上火災保険(神戸の川崎系)の取締役会長、さらに明治火災、豊国火災の取締役をつとめ、保険業界のオーソリティとして活躍した。三大財閥の重要企業の重役をつとめた者は、あらゆる業界を通じて平生1人である。私は平生の経営者としての活動については、これまで多くの研究を重ねてきたが<sup>(1)</sup>、平生はまた経済評論家でもあり、当時の時事問題につい

---

(1) イ、「平生鈆三郎の経営理念と教育理念」(秀村選三・作道洋太郎編『近代経済の歴史的基盤』、ミネルヴァ書房、1977年)。

ロ、「平生鈆三郎と大正海上火災の設立」(甲南大学経営学会編『現代経営管理の研究』、千倉書房、1986)。

ハ、「関東大震災と平生鈆三郎」、『甲南経営研究』第29巻第1号、1988)。

ニ、「大正期における専門経営者の人脈形成」(『彦根論叢』、第262・263合併号、1989)。

ホ、「平生鈆三郎の財閥批判」(甲南大学経営学会編『現代経営学の挑戦』、千倉書房、1990)。

ヘ、編著『平生鈆三郎日記抄』上・下、思文閣出版、1990。

て鋭い批判を日記の中で多く展開している。本稿ではとくにその中から、平生の三菱、三井、住友の三大財閥に対する批判を取扱うことにするが、その前に大正期の平生が、どのような社会観や人間観を持っていたかを検討しておかなければならない。

(A)儒教。平生は幕末に下級武士の家に生まれ、武士道とともに儒教的倫理観を身につけて明治時代をすごしたが、大正期の儒教が自由と平等の観念を主張し、自己の人格の完全な発現のために、利益、身分、社会上の地位の分配を公平にすべきであるとの見解に対し、強い賛意を示していた。

(B)日蓮宗。平生は大正7年の初めごろから、日蓮の思想に共鳴していったが、日蓮宗は他の宗教よりもはるかに国家意識が強く、また個人の人格完成を目的とする禅宗などよりも、はるかに社会共存主義であり、自己の利益だけではなく、取引先や従業員、さらに一般大衆の福利も考慮しなければならぬという、平生の思想形成の基盤となった。社会共存主義による「菩薩行」の実行は、平生にとって最大の課題となった。

(C)日本主義。明治的ナショナリズムの強い影響をうけて育った平生は、熱烈な天皇制賛美論者であり、国体や国情の異なる欧米の新思想は、武士道精神が潜在する日本には簡単に定着しないと考えていた。しかし第一次世界大戦後に盛んになってきた、サンヂカリズムなどの新思想が日本に上陸するのを見た平生は、強い危機感を抱き、天皇制のもとに財産の公平な分配と社会的調和を志向する、「日本主義」を主張し始めた。

(D)民本主義。平生は河上肇や吉野作造らのデモクラシー論議から大きな影響を受け、東京海上の社内で経済的民本主義を主張し、社員への賞与の分配率をめぐる、本社専務の各務謙吉と鋭く対立するにいたった。また社外において、世襲財産制度批判や、持株会社や財閥への否定的見解を打ち出したのである。

このような社会観や人間観を持つにいたった平生は、ユニークな社会派論

客として関西財界でも有名な存在になっていった。

## 2. 平生の世襲財産制度批判

このような思想動向を持っていた平生は、第一次世界大戦期から戦後の景気高揚期にかけてのインフレによって、階級分化が激しくなり、米価をはじめ諸物価が高騰して庶民の生活は苦しくなり、一方で大財閥をはじめ資産家が贅沢の限りをつくすのを見て、世襲財産制度に対する批判を強くし、また戦時利得や土地成金に対する批判をも強く持つようになっていった。

しかし平生は基本的には、私有財産制度を否定する共産主義に同調したのではなく、私有財産制度にもとづく自由競争こそが人類の進歩の原動力であると信じており、競争による社会の進歩調節を阻止する制度や習慣を除去し、その発生を抑止するような制度・法律を設けることは、社会秩序や人類福利のために必要であることを主張し始めたのである。まず彼の世襲財産制度に対する批判を聞こう。これはリード著『財産相続廃止論』（原書名は不明）の影響を強く受けたようである。

平生は大正10年7月23日に大阪倶楽部で行われた、大阪貿易協会の会合で、岩井勝次郎、結城豊太郎などに向けて次のように論じている。

「余ハ我税法ヲ根本的ニ改正セントスルモノナリ。即チ日用品ニ対スル課税、即チ消費税、食塩・砂糖・綿布等ニ対スル間接直接ノ収税、又ハ交通税ノ如キモノ、進ンデ營業税ノ如キ事業経営ニ対スル課税ハ、可成全廃若クハ軽減シ、国費ヲ支弁スベキ租税ノ本源ヲ財産相続税ニ置カントスルモノナリ。換言スレバ不勞所得ニ向ッテ重税ヲ課シ、以テ一方ニ於テ不勞所得者ヲ減ジテ不生産的勞力ヲ少ナカラシメ、又不勞所得者ガ受クル資本ヲシテ不生産的ナラシムルコトヲ防止シ、一面不勞所得ノ蓄積ニ依リテ、一人一門一家ニ莫大ナル財富ノ凝結ヲ予防シ、以テ社会ノ安定ヲ保タント欲スルモノナリ。若シ夫レ日本ノ富ガ五百億トシテ、之レガ二十年目ニ漸次相続セラルルモノトセ

バ、貳拾五億ノ財産ハ年々相続セラルルモノナリ。仮リニ最高五割ノ相続税ヲ課スルモノトシテ、平均貳割トスルモ五億円ノ相続税ヲ徴スルヲ得ベシ。我国ノ經常収入ハ、七〜八億ニ過ギズ、然ルニ五億円ノ相続税ヲ徴収スルヲ得バ、細民ノ血税トモイフベキ各種ノ消費税、通行税及事業経営ヲ阻止スベキ營業税ヲ全廃シテ余アルベシ。余ハ収税上ヨリモ又社会政策上ヨリモ、最モ好財源タルヲ信ジテ疑ハズ。<sup>(2)</sup>」

この平生の提案に対し、岩井勝次郎は色を失って啞然とし、結城豊太郎は「最モ面白キ提案ナリ」と賛意を表し、他の若い出席者はむしろ痛快さを感じたという。

さらに平生は米価高騰によって下層階級の生活が悪化し、財閥系の企業でストライキが続発するのを見て、次のように論じている。

「飽食暖衣、拱手傍觀シ、コノ解決ニ向ッテ進ンデ何等ノ手段ヲトラザル資本家ノ無策暗愚ヤ、実ニ憐ムベキモノナリ。是レ財産繼承ノ余弊ナリ。若シ我国現時ノ大工場主ガ、自己ノ材能ト努力トニ依リテ巨富ヲ為シタル人、コノ成功ヲ遂ゲタル人ナランカ、彼等ハ自ラ解決ノ方法ヲ講ズベキモ、藤永田、三菱、住友、川崎、古河等、何レモ父祖ノ事業ト財産ヲ繼承セル不勞所得者ノ手ニ依リテ所有セラレ、其主人若クハ臣下ニ依リテ經營セラレツツアルモノナレバ、創立者ノ如ク職工ニ対シテ同情ト理解ヲ有セザルモノナリ。其臣下ニシテ經營ノ任ニ当ルモノモ、主人ノ代表者トシテ主人ノ利害ノミヲ考フルト共ニ、自己ノ位置ヲ顧慮スル輩ニ過ギザレバ、職工ノ身ニ為リテ考慮スルノ位地ニアラズ。是レ円満ナル解決ヲ見ル能ハザル主要原因ナリ。コノ点ヨリ考察スルモ、凡子庸嗣ニ莫大ナル財産ト廣大ナル事業ヲ繼承セシムルコ

---

(2) 「平生日記」，大正10年7月24日。

(3) 大正10年4月の大阪電灯の争議をさきがけとして、5月に藤永田造船所、6月に住友電線製造所、住友製鋼所、住友伸銅所、さらに神戸の三菱神戸造船所、川崎造船所、三菱電機、神戸製鋼所など、関西の主要な重工業企業へと争議が波及していった。

トノ、社会的錯誤ナルコト明白ナラズヤ」<sup>(4)</sup>

要するに平生は、財産相続税の存在とそれを保証する法体系によって、自由な競争による社会の活力が失われてゆくのを憂えていたのである。平生は美濃国加納の没落下級武士の三男に生まれ、苦学して東京外国語学校に入学し、学制改革のため東京商業学校語学部、東京商業学校、東京高等商業学校と転々とし、やっと明治23年7月に東京高等商業学校を卒業し、27年7月に東京海上保険に入社して、専門経営者への道を歩んだという経歴を持っていた。何等の資産を持たずに、自己の能力だけを頼りにしてエリート・ビジネスマンの誇りを持っていた平生が、大正デモクラシーなどの影響をうけて、無能な嗣子が親の財産を継承して企業の経営者になって社会の活力をそぐことは、我慢がならなかったのである。

また大正10年9月2日に大阪倶楽部で、物価調節と租税の関係について議論が行われた。平生は、必要な政費を支弁するための財源は租税によらざるべからず、租税の中で最も公正で徴収可能なものは、戦争による戦時利得、土地騰貴による不労所得に課する税金であるとし、つぎのように論じた。

「不労所得トハ、第一遺産ニシテ、第二ハ投機所得ナリ。更ニ社会ノ進運ニ伴フ地価ノ昂騰ヨリ生ズル差益、第四戦争其他ノ国家的事件等ノ為ニ得タル異常ナル利益等是ナリ。戦争ニ依リテ生ジタル不労所得ニ向ッテハ、戦時利得税トシテ普通ノ利益以上ニ向ッテ重税ヲ課セル以上、平時ニ於ケルモノニ向ッテモ同様ノ手段ヲ執ルコト決シテ不当ニアラズ。如此クスル時ハ、資本ノ浪費ヲ防止シ、不生産的労力ノ存在ヲ撲滅シ、不労所得ニ依リテ遊食スル惰民ヲ退治シ得ベク、為ニ生ズル社会ノ利益ハ蓋シ少々ニアラザル可ク、一举兩得ニアラズヤ」<sup>(5)</sup>

この平生の論議は、明治維新後の工業化によって、各産業における企業家

---

(4) 「平生日記」, 大正10年8月4日。

(5) 「平生日記」, 大正10年9月2日。

平生夙三郎の各財閥論（三島康雄）

的成功によって資産家になった人たちが、第一次世界大戦による戦時利得と、不動産の騰価による不労所得を得たことに対して、経済民主義の立場から厳しく批判したものであった。この論議は当然にも軍備縮小論と、軍事費支出のための営業税、専売税、織物税の「苛斂誅求」に対する批判に発展していったのである。

### 3. 家憲ならびに持株会社に対する批判

大正8年11月1日に家憲制定会から、次のような文書が送られてきた。

「這般ノ欧州大戦以来、經濟界ノ發展ニ伴ヒ、都市及郡村其資材ノ増殖ヲ成セル折柄、家屋ヲ保護シツツ之ヲ有利ニ運転シテ、以テ家督ヲ永遠ニ伝ヘ、一家ノ繁永ヲ期スルハ刻下ノ急務ニ有之候。殊ニ危険思想ノ發生ニ際シ、国体及家族制度ヲ維持スル上ニ於テ一層必要ヲ感ズルヲ以テ、本邦現在ノ旧家及富豪ノ家憲・家法・家訓等ノ調査ヲ遂ゲ、之ヲ基礎トシテ家憲正鑑ト題シ、<sup>(6)</sup>同好ノ士ニ頒ツ、云々」

すでに江戸時代に大阪の豪商は、自家業の繁栄と拡大維持を願って家訓を作る家が多かったが、明治から大正にかけての工業化時代に、各地で簇生した資産家は、三井や住友・鴻池などの旧家を真似て家訓、さらに家憲を作る者が多く、一種の流行現象になっていた。<sup>(7)</sup>世襲財産制度に対して厳しい批判を行っていた平生は、このような家憲や家法が、財産の蓄積や相続の方法を規定し、世襲財産の外枠を設定し始めていることに、強い批判を持っていたことは当然である。

「家憲・家法ヲ以テ人為的ニ財産ノ保存ト蓄積ヲ計リ、愚子愚孫ヲシテ父祖ノ余沢否遺産ニ依リテ、驕奢ニ耽リ安逸ヲ貪ラシメ、堅実ニシテ励精ナル働

---

(6) 「平生日記」、大正8年11月1日。

(7) 安岡重明「商家における家憲の成立（試論）」（同志社大学人文科学研究所『社会科学』、24号、1978）、pp. 1～10。

手ヲシテ向上ノ機会ヲ得セシメザルコトガ、社会ニ不公平ヲ現存セシメ、以テ不平不満ノ氣ヲ澎湃タラシメ、労働ニ従事スル人々ヲシテ資産家ニ対シテ呪咀怨恨ヲ抱カシメ、其極彼等ヲシテ危険過激ノ思想ヲ懷抱セシメ、延テ社会ノ紀綱ヲ紊乱セシムルニ至ラン。左レバ家憲・家法ヲ以テ単ニ家ノ祀ヲ絶タザラントツトメ、以テ国体ノ保存ニ資セシコトハ国民トシテ尊ブベキコトナランガ、家憲・家法ヲ以テ徒ラニ財産ノ保存ト蓄積ヲ計リ、愚子愚孫ヲシテ父祖ノ遺産ニ頼リテ、安逸放縱ナル生活ヲ得セシメンコトハ、是自然ノ原則ヲ人爲ヲ以テ制止シ、社会ニ不公不平ヲ横行セシメントスルモノニシテ、危険思想ノ源泉ハ茲ニ在リト思フ。余ハカカル家憲ヲ以テ徒ラニ財産ノ保存ト蓄積ヲ企ツルコトハ、法律ヲ以テ禁止スベキコト、恰モトラスト・カルテルノ如キ人爲的独占制度ハ、法律ヲ以テ禁止スベキコト同様ト思料ス。私有財産ハ寧ロー家ヲ支ヘ家名ヲ存続スル程度ニ止メ、余財ハ之ヲ国帑ニ収容スルヲ以テ、社会人類ノ幸福ヲ増進スベキ制度ナリトス」<sup>(8)</sup>

平生の批判は、さらに当時さかんに設立されつつあった持株会社に向けられていった。政府はこのころ、大正6年と9年に所得税制度を改革し、個人の配当所得はこの時期から配当の60%に総合課税を行ない、累進税率を強化したのに対し、法人の配当所得には5%の比例税が課されることになって相対的に優遇され、これによって持株会社を設立する法制的背景が整備され、<sup>(9)</sup>いわゆる大正財閥が続々と名乗りを上げたのである。

このような傾向に対して、平生の放った批判は次のごとくである。

「余ハ東京ニ於ケル大実業家等ガ、各種ノ名義（総本店、同族会、合名会社、合資会社）ヲ以テホールディング・カンパニーヲ作り、其名義ノ許ニ公然ト脱税シツツアルヲ以テ、新税法ノ賦課ヲ受クルコト比較的輕少ナルヲ以テ、平然トシテコノ膨大ナル軍國的予算ニ対シ敢テ抗義的言動ヲ為サズ、又軍備制

(8) 「平生日記」, 大正8年11月1日。

(9) 志村嘉一『日本資本市場分析』, 東京大学出版会, 1969, p. 413。

限ハ列強何レノ国ニ於テモ憂国有識間ノ重要問題トシテ論議セラレツツアルニモ拘ラズ、公然名乗ヲ揚ゲテ之ヲ高調スルモノナキハ如何。彼等ハ政商トシテ政府ノ権力ヲ利用シテ私利ヲ謀ルモノニアラザレバ、巧ニ脱利シテ負担<sup>(10)</sup>重カラザルヲ以テ酒タタル、私利的実業家が多数ヲ占ムルヲ以テナラズヤ」

平生は続々として設立された大正財閥が、これまで資産家として富の蓄積をはかり、新所得税を利用して個人の持株を持株会社に移し、脱税を意図していることを痛烈に批判したが、他方で自己の利他主義の信条にもとづき、富豪が自己の積富の一部を社会公共の福利のために出資するのが当然であると<sup>(11)</sup>考え、これを行わないで持株会社を組織してますます致富の道を走る富豪を、厳しく指弾したのである。ここまで来ると、平生の論点は当然にも財閥批判へとつながってゆく。

#### 4. 平生の財閥論

平生の日記には「財閥」という言葉は、ほとんど出て来ない。大正時代には「財閥」は、一般的に資産家という意味に用いられていたようで、今日のように学問的に定義された、厳密な意味では用いられていなかったからであろう。しかし平生は実質的に「財閥」批判をしばしば行っており、ここでその代表的な見解を聞いてみよう。

大正14年9月19日に、平生は信交会という会合で演説を行なったが、まず自らが<sup>(12)</sup>大正14年9月5日から15年4月17日まで、欧米旅行に行った時の見聞にもとづいて、欧米とくにアメリカ合衆国では、大資本家または富豪と称せられる者は、正々堂々と社会の表面に立って大道を闊歩している点を指摘し、さらに次のように論じた。

---

(10) 「平生日記」，大正10年4月1日。

(11) 三島康雄「平生鈆三郎の財閥批判」（甲南大学経営学会編『現代経営学の挑戦』，千倉書房，1990），p. 7。



「日本ニ於テ富豪ト称セラルルモノハ、社会ノ蔭ニ隠レ居リ、恰モ日蔭者ノ如キ觀アルコトナリ。日本ノ最大金持トイフ岩崎久弥男ノ如キ、少シモ社交界ハ勿論、公会ノ席ニモ現ハレズ、日々自宅ト家庭事務所ノ間ヲ往来シ、加之營利的画策ニ参与スルト聞ク。又三菱合資会社ノ代表トモイフベキ社長岩崎小弥太男モ又公会ノ席ニ出ヅルコトナク、日々自宅ト本社トノ間ヲ往来ス。而シテ三菱会社及岩崎家ノ代表ニテ世間ニ顔ヲ出スモノハ、其番頭又ハ家令格ノ人々ナリ。三井家ノ主人ニ至リテハ、何人モ其存在ヲ認メズ。彼等十一家ノ主人ガ何処ニ住ヒ、如何ナル人物ナルヤヲ知ルモノ稀ナリ。三井合名会社ニ総理事団琢磨氏アルコトハ何人モ知ルモ、其社長ハ何人ナルヤヲ知ラズ。三井銀行ハ池田成彬、米山梅吉氏アルヲ知ルモ、其頭取ガ何人ナルヤヲ知ラズ。三井物産ニハ安川、竹村、南条其他ノ重役アルヲ知ルモ、其社長タル三井守之助ナルコトハ、余ガ知人ナルヲ以テ知レル位ナラン。住友ノ家長ハ吉左衛門氏ナルヲ知ルモ、其風貌ニ接シタル人幾人カアル。時々列車中ニ於テ一隅ニ淋シゲニ座シテ、孤独ヲ嘆ゼラルルガ如キ態度ヲ見ルコトアルノミ。鴻池善右衛門氏ニ至リテハ、其飼養セラルル鶴ヲ知ルモノハ多数ナルモ、其風采ヲ知ルモノ少ナカラン。

古河虎之助、安田善次郎、善四郎、山口吉郎兵衛、広岡久左衛門氏、其他皆然リ。日本ニ於テハ富豪ハ日蔭者ニシテ、前立タル番頭ガ揚々タルガ普通ナルガ如シ。何故ニ如此キ異様ナル現象ヲ呈シツツアルヤヲ研究スルニ、是レ日本ノ大資本家、日本ノ富豪ガ自己ガ尽クスベキ本務ヲ全フセズ、自己ガ為スベキ努力ヲ吝ムガ為メナリト思フ。凡テ世ノ中ニ必要ナキモノハ漸次其勢力ヲ失ヒ、終ニ滅亡スルハ生物ノ原則ナリ。往昔マムモーストイフ巨大ナル動物アリシト聞クガ、今ヤ欧米ノ博物館ニ、発掘セラレタル骸骨ノ一部ヲ残スノミ。是ハ世界ノ進歩ト共ニ、ノサバリツツアル暴飲暴食ノ大獣ノ生息ヲ許サザルニ至リタルヲ以テナリ。」<sup>(12)</sup>

(12) 「平生日記」、大正14年9月20日。

平生は大正期における第一次世界大戦後の社会的矛盾，すなわち米騒動や関西の重工業企業の相次ぐ争議によって象徴される，庶民や労働者階級の生活の貧困化と，他方で明治初期からの工業化期に多角化した財閥，とくに三菱，三井，住友の三大財閥が，持株会社（三菱合資は明治26年，三井合名は明治42年，住友合資会社は大正10年）を相次いで設立し，傘下の企業からの巨大な配当を吸上げて，持株会社の所有者である岩崎，三井，住友の一族が，当時の日本の蓄積資本に比較してあまりにも莫大な個人資産を蓄積して，矛盾が増大しつつある点を鋭く批判したのである。そして平生自身が貧乏士族から身を起して専門経営者に上昇した経験から，日本経済をリードしているのはビッグビジネスの専門経営者であり，したがって専門経営者は明朗に社会の表街道を闊歩できるが，財閥の当主たちは社会の批判を恐れて「日蔭者」の生活をしなければならぬのである。

それでは財閥の当主たちは，どのような行動をとればよいのか。平生は次のように述べている。

「左レバ大資本家及ビ富豪ガ世襲的ニ存在スルノ必要ナクンバ，自然ニ消滅ノ運命ニ逢着スルハ当然ノミ。故ニ英米ニ於テハ大資本家及富豪ハ，或ハ研究所，或ハ学校，或ハ病院，或ハ美術館，或ハ図書館，或ハ何々会館ヲ建設シテ，社会公益ノ為メ巨額ノ出資ヲ為ス。如此キ施設ハ大資本ヲ有スルモノニアラザレバ，之ヲ実行スル能ハザルモノニシテ，其設備ニ依リ不治ノ病ト称セラレタル病氣ニ対シテモ治療ノ方法発見セラレ，家貧フシテ十分ナル治療ヲ受クル能ハザルモノモ温キ bed ノ上ニ名医ノ診察ヲ受ケ，天女ノ如キ nurse ノ看護ヲ受クルヲ得ベク，無料ヲ以テ美妙ナル音楽ヲ聞キテ一日ノ苦ヲ忘ルルモノアレバ，書籍ヲ求ムルノ資ナキ篤学ノ人モ，free library ニ於テ知識ヲ涵養スルヲ得ベク，斯クノ如クシテ多数ナル貧困者モ富豪存在ノ必要ヲ感ズルナラン」<sup>(13)</sup>

---

(13) 「平生日記」，大正14年9月20日。

すなわち平生は自己の信条とする修正資本主義の枠内での経済的民本主義、社会共存主義、人格主義などにより、巨大な財産を勞せずして獲得する財閥の当主たちは、研究所、病院、学校、美術館、図書館、会館などの公共施設などへ多額の出資をすることにより、その存在を社会的に容認されるという結論に達したのである。以下に展開される各財閥に対する批判も、同じ論拠によって展開されるのである。

## 5. 平生の各財閥への批判

(A)三菱財閥。平生が専務取締役・阪神兼任支店長として勤務していた東京海上火災保険株式会社は、いうまでもなく明治11年8月の創立以来、岩崎弥太郎（明治18年に死去後は長男の久弥）が筆頭株主であり、三菱財閥の有力傍系会社であった。財閥論の公式的見解にしたがえば、平生は岩崎家に対して強い忠誠心を持っていた筈であったが、事実はどうであったろうか。

平生は大正5年7月に岩崎久弥が三菱合資会社の地位を従弟の岩崎小弥太に譲ったのを聞くと、直ちに匿名で次のような手紙を送っている。

「前略、貴下ニ於テハ今後三菱合資会社々長ノ印綬ヲ従弟小弥太君ニ譲リ、退隠相成ノ由、断然タル此御処置ハ、貴下ガ春秋ニ富ミタル身ヲ以テ、将来営利事業ヲ投ゲウチテ、専心公共的国家的社会的天職ヲ全フセントノ御決心ニ出デタルモノト確信シ、為貴下慶賀ニ堪ヘズ候。

従来貴下ガ先代弥太郎氏ノ後継者トシテ、日本ニ於ケル大富豪ノ主人トシテ、豪モ国家的社会的事業ニ貢献セズ（強制指令ヲ除キ、癌研究所へ寄附及ドクトル・ミューラー図書ヲ東大へ寄附セラレタルヲ聞ク）、三菱合資会社社長トシテ営利的事業ニ汲々トシテ、単ニ自腹ヲ肥シ自家ヲ富マスノ外、他ヲ顧ミザルヲ見テ、如此キ富豪ノ輩出ハ遂ニ我国家ノ基礎ヲ危フシ、社会ノ秩序ヲ乱ス如キ思想ノ醸生瀰蔓ヲ誘致スルモノトシテ寒心ニ堪ヘズ、遠カラズシテ貴下ノ部下中、思フ茲ニ致ス者出ヅルナラント鶴首致居リシニ、元老

平生夙三郎の各財閥論（三島康雄）

トモイフベキ莊田，豊川諸氏ノ如キ，退社ニ臨ミーター一言之及バザリシガ如ク，御近親中ニモ加藤男ノ如キ頭腦明晰ナル人アルモ，多クハ理性一辺ノ人ニシテ，此点ニ想到セザルガ如ク，実ニ嘆息致居候トコロ，今回ノ御決心ハ貴下ガ自発的ニ此点ニ想到セラレタル事ト存ジ，国家ノ為メ又貴家ノ為メ欣幸ニ堪ヘズ候。玆ニ満腔ノ喜ヲ述べ，刮目シテ将来營利以外ニ於ケル貴下ノ活動ヲ囑望致シ，無言失辭御容赦下サルベク候。尚種々ノ臆説ヲ恐レ，故ラニ匿名ト致候段御容赦下サルベク候<sup>(14)</sup>」

平生がこの手紙を出した岩崎久弥は，三菱財閥の創業者である弥太郎の長男として，慶応1年（1865）8月に生まれ，慶応義塾幼稚舎と三菱商業学校をへて明治24年5月にペンシルヴァニア大学を卒業し，同年10月に三菱社副社長に就任し，26年12月に三菱合資会社が商法にもとづいて設立されると，弥之助（弥太郎の弟，三菱社社長）に代って新しく社長に就任した。しかし久弥はまだ29歳であり，叔父の弥之助が監務という後見役に就任してすべての決定に参画し，明治41年に死去するまで三菱財閥の最高意思決定に大きな影響力を発揮していた。さらに弥之助の長男の小弥太は，イギリスのケンブリッジ大学を卒業して帰国した直後の明治39年5月から，三菱合資会社の副社長に就任して果敢な実行力と強い統率力を発揮し，41年に分権的事業部制を採用するのに尽力したといわれ，この時期に三菱の炭坑，鉱山，造船，銀行，貿易，倉庫などの事業を実質的に発展させたのは，近藤廉平，莊田平五郎，豊川良平，末延道成らの，子飼いの専門経営者であった。久弥は温厚で地味な性格であり，大正5年7月に小弥太に三菱合資社長の地位を譲るまで強烈なリーダーシップを発揮したことはなく，「岩崎一門の長者」として，シンボリック的存在であった<sup>(15)</sup>。

このように三菱財閥の運営にほとんど関与せず，農牧業を愛した久弥でさ

---

(14) 「平生日記」，大正5年7月2日。

(15) 三島康雄編『三菱財閥』（日本経済新聞社，1981），pp. 37～40。

えも、持株会社を通じて自動的に富が蓄積される「財閥」の当主であるという点で、平生の批判の対象であったのである。

三菱合資が大正6年から10年にかけて、直営の事業部を株式会社として独立させ、自らは持株会社としての統括機能を純化させる方針を明確にすると、保険課を独立させて三菱海上火災保険株式会社を設立させようという動きが、東京海上の反対の意向を押し切って日ごとに強くなり、ついに大正8年2月に同社は資本金500万円で設立された。この時の平生の岩崎家に対する怒りと反感は極点に達し、「三菱一家」を「忘恩の株主」と痛罵すること、数回に及んだ。<sup>(16)</sup>

三菱海上が設立された後も、平生の岩崎家への批判は続けられた。

「若シ私有財産制度ガ法律ヲ以テ認メラレザルニ於テハ、岩崎家ガ事業ニ投ゼル資本ノ利益ハ、総テ事業ノ拡張ニ利用スルコトハ国家的観念ニ出ヅルモノナリトシテ、余ハ推奨措ク能ハザルモ、其元利ガ総テ岩崎家ノポケットニ入ルモノトスレバ、彼等ハ資本主義ノ奴隸トシテ資本ノ増殖ニ熱中スルモノニアラズヤ。何故ニ彼等ハ利益ノ一部ヲ割キテ、社会公共事業ニ投ズルコトヲ為サザルヤ。彼等ガ東京倉庫爆発ニ際シ、周章狼狽、百万金ヲ投ジタル如キハ、平素公共ニ尽クスノ念乏シキニ原因スルニアラザルヤ」<sup>(17)</sup><sup>(18)</sup>

さらに平生の批判は岩崎小弥太にも向けられた。小弥太は弥之助の長男として明治12年に東京で生まれ、第一高等学校、東京帝国大学法科大学をへて、明治38年に英国のケンブリッジ大学を卒業し、前記のように三菱合資の副社長をへて社長に就任し、積極的な改革で三菱財閥の大正・昭和期の発展を進

(16) 三島康雄「平生鈆三郎の財閥批判」（甲南大学経営学会編『現代経営学の挑戦』、千倉書房、1990）、pp. 9～16。

(17) 大正6年5月5日に東京倉庫（後の三菱倉庫）の芦分橋倉庫（大阪市）の塩化曹達が爆発し、莫大な物的損害と「百数十人」の死傷者を出した。岩崎久弥は直ちに来阪し、100万円を弔慰・賠償費として大阪市に託した（三島康雄編『平生鈆三郎日記抄』、上巻、思文閣出版、1990）、pp. 204～211。

(18) 「平生日記」、大正8年10月25日。

め、「英明君主」の誉れが高かったのである。<sup>(19)</sup>

「実ニ彼等富豪ノ継嗣者ハ、倭漢ノ進言ニ耳ヲ傾クルヲ常トスルヲ以テ、岩崎小弥太氏ノ如キ氣鋭ニシテ深慮ナキ人ハ、単ニ部下ノ煽動的画策ヲ盲信シ、其結果ガ両家ノ不和確執ヲ世ニ発表スルニ至ル恐アルコトニ氣付カズ、彼等ヲシテ益自己ノ功名ヲ浅慮ナル社長ニ示シテ、其恩賞ニ与ラント企ツル小人輩ニ誤ラレツツアルコトヲ知ラザルハ、真ニ惜ムベキモ、何等ノ艱難ヲ経ズシテ、単ニ父ノ勲功ト遺産ニ依リテ、榮爵ト財富ノ余恵ニ浴シツツアルモノトシテ、当然ノ事ナリ」。<sup>(20)</sup>

このように三菱財閥の大正・昭和期を代表する英明で氣鋭の小弥太でさえも、財閥の当主として「榮爵ト財富ノ余恵」にあずかっているかぎり、平生の批判を免れることはできなかったのである。また明治23年に東京海上に入社して、それ以来三菱財閥に関係してきた平生は、明治時代の財閥創始期に積極・進取の氣風を持っていた莊田平五郎、豊川良平などの専門經營者が引退した後、大正期の専門經營者たちがこの氣風を受けつがず、自己の利益ばかり計っているのを嘆かざるを得なかった。

「而シテ之ニ從フ群臣モ亦彼（久弥のこと……著者）ノ慾心ニ迎合シ、財富ノ増殖ヲ之レ事トシテ、自己ノ収入ノ増加ヲ計ラントスルモノノミニシテ、コノ膨大ナル財産ヲシテ社会ノ為ニ其一部ヲ供シ、以テ岩崎家万代ノ礎ヲ造ルコトヲ考慮セザルガ如キハ、不忠ノ人々トイフベシ」。<sup>(21)</sup>

以上のように平生は自らの属している三菱財閥に対しても、莫大な財産を繼承するだけで、社会公共の為に利用しないという明確な論点により、財閥当主ならびに専門經營者たちを厳しく批判したのである。

(B)三井財閥。平生は三井財閥に対しては、むしろ親近感を持っていた。明治

---

(19) 三島康雄編『三菱財閥』（日本經濟新聞社、1981）、pp. 39～43。

(20) 「平生日記」、大正10年5月26日。

(21) 「平生日記」、大正12年4月12日。

時代の三井は損害保険会社を所有していなかったし、また三井物産の益田孝社長と東京海上の益田克徳が兄弟であったために、三井物産は自社の取扱う貨物の損害保険は、ほとんど全部を東京海上に依頼していたし、また川村貞次郎をはじめとする平生の東京高商時代の友人で、三井物産に在籍していた人たちが、阪神支店長の平生を援助するために、しばしば保険を依頼していたのである。

第一次世界大戦の保険ブームに際して、三井は新保険会社を物産の子会社として設立しようとし、平生に新会社の専務を兼任してくれるように依頼した。三菱・三井の両財閥の間に板ばさみになった平生は、1年あまり苦悩した末、ついに兼任を承諾した。<sup>(22)</sup>この時に平生が述べた、「東京海上が窮地ヨリ脱シテ現在ノ盛運ニ至リシ経路ヲ穿スレバ、三井物産会社、否三井系統ニ属スル余等ノ友ノ後援ガ多キニ居リ、彼等友人ガ余等ノ力戦奮闘ニ対スル同情ガ寄与スルトコロニ大ナリシハ、何人モ否定スベカラザルトコロ<sup>(23)</sup> (後略)」<sup>(24)</sup>、「余ハ海上保険業者トシテ、又東京海上ノ再興者トシテ、三井ノ準親類トモイフベキ位地ニ在リタルモノニシテ、有終ノ美ヲ為スヲ得ベシ<sup>(25)</sup>」という言葉は、平生の三井財閥ないし三井物産に対する個人的な好感情を表現している。しかし三井物産の特徴である、有能な営業マンに個人的に辣腕をふるわせ、利益のあがることならどんなダーティ・ビジネスでもやる社風に対しては、平生はつぎのように批判している。

「三井物産ハ由来人物ノ淵叢ナリトテ、天下ニ喧伝セラルルトコロナルガ、其人材ハ多ク貨殖ノ材器ニ富メルコトヲ言フモノニシテ、天下ノ公器タル材能ノ士ヲ有スルニアラズ。彼等ハ獲利貨殖ニ汲々トシテ、公益ノ如キハ殆ンド顧慮スルモノナキガ如シ。蓋シ三井物産会社ニ於テ社員<sup>チユフチヨク</sup>ノ黜陟ハ、単ニ獲

(22) 『東京海上火災保険株式会社六十年史』, 1940, p. 44.

(23) 『大正海上火災保険株式会社四十年史』, 1961年, p. 21.

(24) 「平生日記」, 大正5年12月22日。

(25) 「平生日記」, 大正6年1月31日。

利ノ多少ヲ以テシ、其手段ヲ択バズ、其人物ニ重ヲ措カザルノ掟ナルヲ以テ、  
彼ノ海軍事件<sup>(26)</sup>ノ如キヲ生ズルニ至リシモノニシテ、其人物高潔ニシテ品性ノ  
清廉ナル人ハ、暁天ノ星ノ如シ。而シテ如此キ社制ハ、永キ将来ニ於テ三井  
家ヲ安全ナラシムル所以ニアラズ。若シ三井家ノ重臣ガ単ニ三井家ヲ利用シ  
テ私腹ヲ肥シ、榮華ノ夢ヲ貧ラントスルモノノミニシテ、三井家ヲシテ社会  
嫉視ノ標のタラシムルニ至ランカ、三井家ハ永久ニ安泰ナラントスルモ能ハ  
ザル可シ。余ハ三井家ノ為ニ公共的事業ヲ推奨スベキ重臣ノ出デントヲ望  
マザルヲ得ズ。<sup>(27)</sup>」

いうまでもなく三井家の発祥は、三井高利が延宝1年（1673）に京都と江  
戸に越後屋八郎右衛門の暖簾<sup>のれん</sup>をかかげて、三井呉服店を開始した時に始まり、  
その後は両替店や幕府御用の為替業務に拡大し、明治維新後は三井銀行、三  
井物産、三井鉱山、三井呉服店を中心にした古い財閥である。三井11家の当  
主たちは三井各社の社長に就任することが多かったが、実際に社業を統轄す  
ることはほとんどなく、実力ある専門経営者たちが、経営の全権を握って指  
揮していた。<sup>(28)</sup>従って平生の三井財閥批判も三井家に対するよりも、これらの  
専門経営者に向けられ、三井家を利用して私利を追求する態度と、公共社会  
に奉仕する決意の欠除を強く指摘したのである。

平生はとくに三井物産の利益万能主義をリードした安川雄之助専務に面と  
向って、「余ハ三井家ニ奉仕スル諸君ノ如キ、有識ニシテ世界ノ事情ニ精通  
シ、其知能モ優秀ニシテ且財力豊富ナル諸士ガ、何故ニカカル大勢ノ推移ニ  
無関心ナルヤヲ疑フナリ。何故ニ諸君ハ骨董品ノ品評ニ費スル時ト、之ヲ購  
入スル金トヲ以テ、社会否政治ノ改善ニ用ヒザルヤヲ怪ムノミ」<sup>(29)</sup>

(26) 正会3年にイギリスのビッカース商会日本代理店である三井物産の重役が、明  
治43年計画の巡洋戦艦「金剛」を、ビッカース商会に注文させるために海軍高官に  
贈賄した事件。

(27) 「平生日記」、大正8年4月30日。

(28) 安岡重明編、『三井財閥』（日本経済新聞社、1982）、第5～6章を参照。



と述べているが、さらに平生が東京海上の専務を辞任して欧米旅行に赴く時に、東京財界の有力メンバーが集まって行われた歓送会の席上で、団琢磨を始めとする三井財閥の指導的経営者を次のように批判した。

「団氏ハ三井ノ最高総裁トシテ、三井王国ヲ背負フテ天下ニ号令シツツ、最も有力ナル実業界ノ一人者ナルモ、氏ノ嗜好ハ骨董ノ蒐集ニアリテ他ニ趣味ヲ有セザルガ如ク、所謂日本ニ於ケル富豪ノ月並の嗜好トイフベク、氏が公共の事業ニ力ヲ致シ、又ハ社会的活動ヲ為セルヲ聴カズ。又氏ハ三井一門ノ最高顧問トシテ、三井家ヲ天下ノ富豪トシテ、日本ノ為メ、日本ノ社会ノ為メニ貢献スベキ自発的の建設事業ヲ遂行セシメタルヲ聞カズ。彼ノ泉橋病院(三井慈善病院)ノ如キモ、シーメンス事件ノ為メ三井ガ世間カラ攻撃セラレタル際、世評ヲ掩ハンガ為メ、為シタル一時的の弥縫策ノ発露ニ過ギズ、決シテ富豪ガ社会ニ貢献セントスル、公明正大ニシテ社会的の觀念ヨリ出デタルモノニアラザルナリ。現在ノ国情ニ直面シナガラ、団氏初メ各重役ガ三井一門ノ為メ、財富ヲ蓄積スルノミニ銳意熱中シテ、豪モ其蓄積セル財富ヲ有効ニ散ジテ、将来ノ為メ三井一門ノ安全ヲ計ルコトヲ努メザルハ、之ヲ以テ決シテ三井家ノ為メニ忠実ナリトイフ可カラズ。若シ真ニ三井家ノ為メニ忠ナラントセバ、世人ヲシテ三井一門ノ徳ヲ謳歌スル様、之ヲ利用セザル可カラズ。」<sup>(30)</sup>

<sup>(31)</sup> 団琢磨は、いうまでもなく当時の三井合名理事長であり、三井の専門経営者の中でも最高の地位にあった。その団に対しても、自分の趣味にのみ金を使って公共設備に出資せず三井家に対しても公共への出資を忠告しない点を、同じ論点から批判したのである。なお平生は明治30年11月から32年10月まで東京海上ロンドン支店に駐在していた時の経験から、イギリスのビジネスマ

(29) 「平生日記」, 大正13年5月22日。

(30) 「平生日記」, 大正14年5月19日。

(31) 団は米国のMIT大学を卒業後、三井炭坑に勤務し、三井鉱山専務理事から三井合名理事長に就任して三井王国を完成し、また日本工業倶楽部理事長にも就任した。

ンは成功して大きな利益を獲得すると、孤児院や養老院に寄附して社会的承認を得るのに対し、日本の実業家は成功しても公共施設への寄附などほとんど行わず、大邸宅を構えて茶会（とくに三井系の経営者）をやり、高価な茶道具の骨董品を競い合うのを苦々しく思っていた。平生自身は骨董趣味は全く持たず、茶会にもほとんど出席しなかった。前記の日記の中で、平生が三井財閥の経営者の骨董趣味に皮肉を述べているのは、このためである。

(C)住友財閥。平生は三大財閥の中で、住友家、とくに15代住友吉左衛門に対して最も好意的であった。住友友純<sup>ともいと</sup>は元治1年（1864）に徳大寺公純の第6子として生まれ、明治25年に住友家の養嗣子となり、翌年に住友家第15代をつぎ、大正15年3月に没するまで住友家長として住友王国に君臨し、貴族趣味で生活を絢爛と飾った。住友家では実際の事業経営を番頭に一任する慣行が、江戸時代から成立しており、友純の時代も、広瀬幸平、伊庭貞剛、鈴木馬左也、中田錦吉、湯川寛吉らが総理事として住友系の事業を発展させ、友純はほとんど事業には関与しなかった。むしろ彼は各界の重要人物を招いてのパーティの開催、本邸や別邸の建設、文化・社会事業への寄附、美術品の蒐集などに、住友家の威信をかけたのである。平生の友純に対する論点を見よう。

「男爵住友吉左衛門氏ハ、本日同総本店理事中田、小倉両氏ヲ大阪市庁ニ遣ハシ、同男ノ本邸、市内南区天王寺茶臼山ノ邸宅敷地壱万八千坪（価格四百万円余）ヲ、市ヘ公園ト為スノ条件ヲ以テ寄附ヲ申出タルコトハ、如何ニ同男ガ公共心ニ富ミ、社会事業ニ尽クサントシテ、常ニ考慮ヲ怠ラザリシヲ示スモノニシテ、余ハ之ヲ聞キ感激措ク能ハザルナリ。我国ノ富豪ガ単ニ財ヲ積ミ産ヲ重ヌルヲ知リテ、之ヲ公共事業ニ投ズルコトヲ知ラズ。富ノ蓄積ヨリ生ズル自己ノ利益ヲ楽ムコトヲ知リテ、之ヲ散ジテ衆ト共ニ享楽スルヲ知ラザルハ、余ガ屢々公言スル如ク、彼等ハ彼等ノ富ヲ、彼等ノ先見ト力量ト

---

(32) 作道洋太郎編『住友財閥』（日本経済新聞社、1982年）、pp. 252～258。

ニ依リテ生ジタルコトヲ知リテ，社会ノ進運，公衆ノ助力ガ之ヲ助ケタルコト多大ナルコトヲ思ハザルモノナリ。（中略）住友男ハ已ニ幾多ノ社会事業ヲ行ヒ，之ガ資金トシテ寄与セシモノ多大ナリ。而シテ如此キ美挙ヲ重ネラルルハ，同男ガ奉公心ニ基クコト勿論ナリトイヘドモ，抑モ同家ノ理事トシテ枢機ニ参ズル人々が，多クハ人格高潔ニシテ理想ニ生キツツアル人ナルモ亦一原因ナランカ。三井，三菱，安田ノ三家ノ如キ，富ノ程度ニ於テ住友ヲ凌駕スルモノナランニ，官眷ノ強要若クハ民間ノ有力家ノ懇請アルニアラザレバ，自発的ニ寄与ヲ為サザル如キハ，実ニ社会ヲ毒スルモノトイフベク，余ハ余ガ終生ノ事業トシテ主張セントスル，遺産ニ重加ナル相続税ヲ賦課スルニアラザレバ，到底彼ノ迷夢ヲ覚マス能ハザルヲ遺憾トス。住友男ノ如キハ，実ニ尊崇スベキ先覚者トイフベシ。而シテ同男ガコノ大邸宅ヲ市ニ寄贈シテ，自ラハ鰻谷ノ小邸ニ新宅ヲ築キ，簡素ナル生活ヲ楽マントスル心事ノ平民的ナルコト，実ニ文化的紳士ノ典型トシテ敬意ヲ禁ズル能ハズ。同男ノ長女ニシテ忠輝氏ノ夫人ガ最モ平民的ニシテ，常ニ外出スルモ侍女ヲ伴フコトナク，自ラ市中ニ買物ヲ為スヲ見ルコト屢々ナルハ，同男ノ志ヲ伝フルモノニシテ，敬服ノ外ナシ。」<sup>(33)</sup>

以上のような住友友純に対する，平生の過度とも思える賞讃には，色々の理由が考えられる。友純が貴族の出身で高雅な趣味を持ち，社会事業や文化事業に対してかなり高額の寄附をしていたことが，第一の理由である。さらに住友家が銅生産を中心に発達した，比較的地味な財閥で，「浮利を追わず」をモットーにし，第一次世界大戦中の貿易ブームの時も商社を設立しなかったことも，三井物産の利益万能主義を厳しく批判した平生にとって，好ましく思われる状態であつたろう。また明治33年から昭和15年まで，40年間にわたって阪神間に居住した平生にとって，東京に本拠を置く三井や三菱にくらべて，大阪に本拠をおく住友は，政商臭の少ない財閥と思われたに違い

---

(33) 「平生日記」，大正10年12月7日。

ない。また平生は住友財閥の専門経営者たちに対しても、三井や三菱の専門経営者に対するよりも好意的であったが、それでも禅によって身を修めるだけで、公共奉仕の念の少ない点を批判するのを忘れなかった。

「住友家ニハ大学出身ノ多数ノ重役アリテ、其人物モ亦見ルベキモノアリトイヘドモ、彼等ハ自己ノ修養ニ依リテ主家ニ忠勤ヲ抽ンデ不正不義ヲ敢テセザルノ人々ニシテ、一步ヲ進メテ社会国家ニ貢献セントスルノ公共心アルモノヲ聞カズ。彼等ハ鈴木総理事ノ下ニ住友家ノ事業ニ従事シ、摯実慎重ニ其経営ニ精励シ、其業ヲ進メ、其富ヲ増スト共ニ、住友家ヲシテ常ニ公益ヲ計ラシムルノ挙ニ出ヅルコトハ、他ノ三菱、三井等ノ幹部トナリテ其経営ニ任ズル人々ノ如ク、単ニ主家ノ富ヲ増シ、以テ自己ノ収入ヲ増サントスル輩ニ比シテ優ルコト数等ナルモ、彼等ハ単ニ住友家ノ忠僕トシテ賞賛ヲ博スベキモ、個人トシテハ自己ノ利害ノ外、他ヲ顧ミザルモノナルコトハ、鈴木総理事ガ禅ニ依リテ修養ヲ積ミタルト称スルモ、所謂俗人ヲ眩マス野狐禅ニシテ、<sup>(34)</sup>梵我一如ノ哲理ニ徹底セルモノニアラズ。」

以上のような鈴木馬左也・合資会社住友総本店総理事の禅宗の教義への帰依についての、平生の批判は日記の中にしばしば登場するが、これは平生が大正初期から日蓮宗の熱烈な信者であったことと無関係ではないであろう。平生によれば、禅宗は自己の精神的修業によって悟りを開くことを目的とするのに対し、日蓮宗は自己の修養と国家・社会の安寧が両立するのが目的であり、この利他主義が「菩薩行」として実行されることが、最も望ましいとの信念を持っていた。禅宗による自己の確立と社会共存主義が並立しないという点が、平生による鈴木に対する批判の根拠に存在したのである。

---

(34) 「平生日記」，大正11年4月30日。

(35) 鈴木は1861年に高鍋藩家老の4男に生まれ、東京帝大政治学科を卒業し、明治29年に住友に入社し、明治37年から大正11年まで住友合資の総理事をつとめた。

## 6. む す び

以上に述べた平生の三菱、三井、住友の代表的大財閥に対する批判には、一貫した論点が存在した。明治期に確立した財閥という社会システムが、少数の家族への富の集中をもたらし、世襲財産制度と持株会社によってこの富の蓄積が制度的に保証され、大戦期のインフレによる労働者・農民層の生活レベルの低下によって、社会的矛盾が拡大し、皇室を中心に富を国民に平等に分配する「日本主義」が破壊されるという点である。それを防ぐためには、財閥当主や財閥の専門経営者たちが、自らの富をなるべく多く公共社会に還元すべきで、それも米騒動や争議や東京倉庫の爆発のような事件が起きた時に、弥縫的に行なうのではなく、自らの「富者の哲学」にもとづいて自主的に行なわねばならぬというのが、平生の一貫した論点であった。

その論点の基礎には、平生が大正期に鋭敏な感覚で身につけた、日蓮宗の社会共存主義、大正デモクラシーの影響による経済的民本主義、天皇制のもとに社会的調和をはかる日本主義、などの理念が絡み合って存在していたことを理解しなければならない。